

石清水八幡宮本八幡宮縁起

—影印、翻刻—

筒 黒

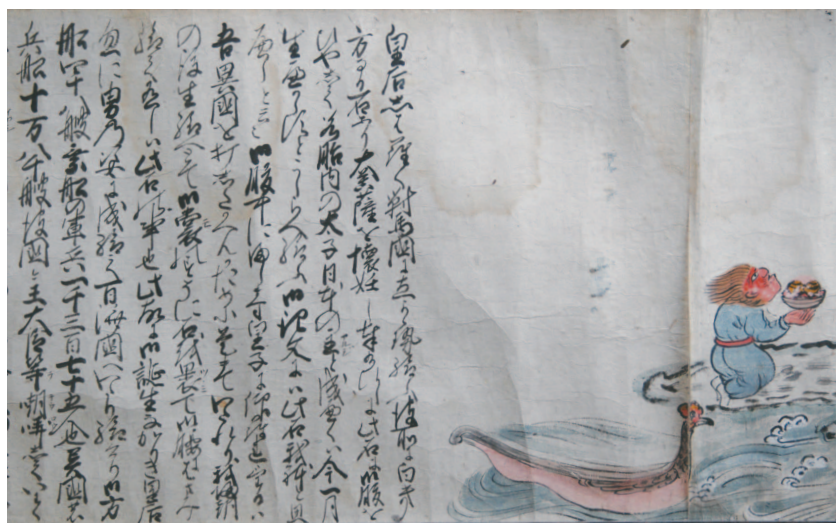
井 田

大

祐 彰





[illegible][illegible]

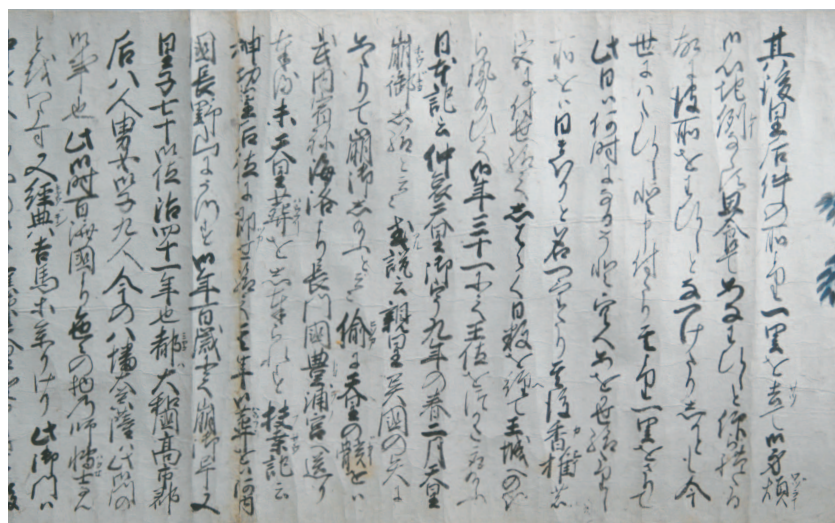




都へいひ給ふ事と聞ひうふ事とあり
 日居げ也と云うめと云ふ國の所はま
 といふ所也と南海より紀伊國へ今を
 是處より日居が船が難波とて海へ
 出渡りて南海より紀伊國へ今を
 其後皇后宮の國を打とて今を統率國
 還着とて十月に橘羽とて今を道
 路と槐木に言付せ給ふ事とて今を
 主所とて今を宮とて言付せ給ふ事
 の事也王子の誕生の時十一月十日
 刻也其時とて卯月とて大母の御
 事也十一月十日御誕生會とて今を
 今に今に産まんとて今也今を記
 日居の所はまの御事とて今を
 今に今に明年の春三月は皇后都へ
 日居の所はまの御事とて今を
 都へいひ給ふ事と聞ひうふ事とあり
 日居げ也と云うめと云ふ國の所はま
 といふ所也と南海より紀伊國へ今を

都へいひ給ふ事と聞ひうふ事とあり
 日居げ也と云うめと云ふ國の所はま
 といふ所也と南海より紀伊國へ今を
 是處より日居が船が難波とて海へ
 出渡りて南海より紀伊國へ今を
 其後皇后宮の國を打とて今を統率國
 還着とて十月に橘羽とて今を道
 路と槐木に言付せ給ふ事とて今を
 主所とて今を宮とて言付せ給ふ事
 の事也王子の誕生の時十一月十日
 刻也其時とて卯月とて大母の御
 事也十一月十日御誕生會とて今を
 今に今に産まんとて今也今を記
 日居の所はまの御事とて今を
 今に今に明年の春三月は皇后都へ
 日居の所はまの御事とて今を
 都へいひ給ふ事と聞ひうふ事とあり
 日居げ也と云うめと云ふ國の所はま
 といふ所也と南海より紀伊國へ今を









略解題

京都府八幡市男山に鎮座する石清水八幡宮は、平安時代に、南都大安寺の僧、行教が、九州の宇佐八幡宮から八幡神を勧請して以来、国家鎮護の守護神として、篤い崇敬を受け続けている。そのような長い歴史を有する石清水八幡宮には、平安時代より現代に至るまで、貴重な文化財が伝来しており、それらの内、古文書類は現在、石清水八幡宮文書として、国の重要文化財に指定されている。

さて、そのような文化財を数多く有する石清水八幡宮に伝来した絵巻としては、永享五（一四三三）年に足利義教が奉納した八幡縁起絵巻と、それを享保一三（一七二八）年に橋継雄が謹写した「石清水八幡宮御縁起」二巻とが著名である。ただし、足利義教が奉納した絵巻は、現存していない。

この二本の絵巻は、諸本分類では乙類系統に属するが、石清水八幡宮には、さらに甲類系統に属する別の絵巻が現存している。それが、本誌で紹介する、『八幡宮縁起』（以下、本絵巻。）である。本絵巻も重要文化財の石清水八幡宮文書の内の一つである。

本絵巻は、『続石清水八幡宮史料叢書 二』（石清水八幡宮社務所、一九九六年）の「石清水八幡宮文書目録」（以

下、文書目録。）榧之部に「榧五 八幡宮縁起 一卷」として著録されている。

以下、本絵巻の書誌的事項を記す。紙本著色一巻で、詞書は漢字平仮名交じりで綴られている。縦二九・四厘、横八六二・五厘。前闕で、内題・外題共に無く、表紙と図一の挿絵は本体から完全に剝離しており、図二の前半部分も失われている。図一の原本法量は縦二九・四厘、横四六・〇厘である。

文書目録の解説には、

外・内題共ニナシ、桐箱ニ収メラル、書キ出シニ、
「其後香椎浜と申……………」トアルニヨリ、前闕カ、二

卷本ノ下巻ノ可能性アリ、著色画ト詞書アリ、正応二

年八月日ノ奥書アリ、

（奥書）
「正応二年八月日」

とある。

文書目録の解説は、本絵巻が前闕なので、通例、上下二巻に分かれている縁起絵巻の下巻に当たると推測している。しかし、本絵巻冒頭の図一や、図二などは、他の伝本では、上巻に描かれているため、文書目録が推測するような下巻に相当するものではない。また、上下二巻の伝本に描かれる鍛冶の翁の前に童子の姿で顕現する八幡大菩薩や、宇佐神宮に参詣する和氣清麻呂の場面を本絵巻は有していない

ため、後闕でもある。なお、本絵巻は、通例、上下二巻に分かれている絵巻の場面が繋がっているので、元来、一巻本であったと推測できる。

ところで、本絵巻の特徴として問題となるのは、奥書の「正応二年八月日」という年号であろう。現在、知られている縁起絵巻の諸本の内、最古の年号は、出光美術館本の元亨二（一三三二）年であり、本絵巻の奥書の正応二（一二八九）年は、その年代を約三十年溯り、それを信じるなら、本絵巻が八幡縁起絵巻最古の伝本となろう。

この「正応二年八月日」の年号について、渡辺文雄氏（図録『八幡信仰とその遺宝』、大分県立歴史博物館、二〇〇一年）や、羽田聡氏（図録『神々の美の世界―京都の神道美術―』、京都国立博物館、二〇〇四年）は、各々、解説で、詞書の筆跡や画風が稚拙な点から、本絵巻の成立を室町時代と推定された上で、この年号は本絵巻の原本の成立年と指摘され、両氏とも「正応二年八月日」成立の原本を想定される。

しかし、本絵巻には、八幡縁起絵巻の諸本の内、現存最古の年号を有する出光美術館本を始めとして、十四世紀に成立したサンフランシスコ・アジア美術館本、軀淵八幡神社本には見えない挿絵が認められる。すなわち本絵巻の図三、図四の挿絵である。

図三の挿絵は、本誌十七号で紹介した岡山県牛窓町に伝来する東原本八幡大菩薩御縁起（上巻）の第四図とほぼ同一である。竜船に乗った安曇磯童が、住吉明神によって招来される場面だが、その磯童の顔には布が垂れている。本絵巻は甲類系統に属するが、この磯童の姿は、乙類系統の絵巻に特有の構図である。

また、図四は、磯童が竜宮城から早珠・満珠の二珠を借り得て、神功皇后に捧げる場面だが、東原本第五図では、竜船に乗った磯童の姿が描かれる。この場面は出光美術館本を始め、先に挙げた十四世紀成立の絵巻には描かれない場面だが、この場面を有する伝本はいくつか有り、それらは東原本と同じく、竜船に乗った磯童の姿を描き、本絵巻のように、浜辺で跪く磯童の姿を描く八幡縁起絵巻の伝本は現在、知られていない。

ところで興味深いことに、本絵巻と同じく、浜辺で神功皇后に早珠・満珠の二珠を捧げる磯童の姿を描く奈良絵本の挿絵が存在する。それが、フランス国立図書館東洋写本室所蔵の『住よしのほんち』の第十八図である（古典文庫『奈良絵本集 パリ本』一九九五年に拠る）。『住よしのほんち』は、八幡縁起絵巻とは別の作品ながら、磯童が神功皇后に二珠を捧げる場面が共通している。

このように、本絵巻が有する図三、図四の挿絵は、古態

を留める十四世紀成立の甲類系統の諸本には見られない挿絵であり、この点から「正応二年八月日」成立の原本は想定し難い。本絵巻は渡辺氏や羽田氏が推測されたように、室町時代頃に成立したと思われるが、「正応二年八月日」の年号に関しては未詳である。

さて、本絵巻は前闕、後闕ながら、東原本と同一の挿絵を有している点や、『住よしのほんち』の挿絵と共通する点など、八幡縁起絵巻の図像の展開を考察する上でも非常に重要な伝本と言えよう。

本絵巻を石清水八幡宮に奉納された晦日貞雄氏については未詳であるため、本絵巻の伝来も不明である。奉納者の晦日氏に関して、大方の御教示を乞いたい。

なお、翻刻に際しては、改行および表記は原本通りとし、句読点は施さず、用字は通行の字体に改めた。また、判読不明部分は□で示した。本文中に挿絵が入る箇所は、図一以下の形で示した。

付記 本書の影印、翻刻を許可された石清水八幡宮の田中恆清宮

司、並びに西中道氏、田中博志氏に心より御礼申し上げます。

本稿は平成27年度科学研究費基盤研究(B)、同佛教大学特別展開研究費による成果の一部である。

石清水八幡宮本八幡宮縁起翻刻

図一

図二

其後香椎^{カシノハマ}浜と申所につかせ給ふ皇后老人に

おほせらるゝ様新羅百済国へ渡付ても彼かたき共
をはいかゝして打したかふへしとも覚えすと仰られける

時老人申様これより西に鹿^{シカ}浜と申所□

に安曇磯^{イソノワラハ}童と申者あり件の童を召て竜宮□

につかはして早珠^{カンジュ}満珠と申二の玉をからせ給へ

此二の珠たにも候者彼国をうちしたかへおはしま

さんこといとやすき事に候と申す其時皇后仰

られけるは件の童をはいかゝしてめすへき老人

答申さく此童はせいなうと申舞^{マイ}を殊に愛侍也

此舞をは又はなゝ舞とも申也其時但彼舞をは

誰人か舞^{マユ}へきやと仰有ければ海中に舞台^{マイダイ}を構

て此老人舞をまひすましけり其舞台石□

成て海中に今にあり其時磯童此舞を愛

せんとて船に乗て舞台近く出来なり

図三

皇后老人に仰ありけるは件の珠の事此童に申

へしと仰ければ老人童に申ていわく汝しらすや

日本国の王御本意をとけられんかために新羅百済へ

渡せ給ふ日本の内に居^イながら国王の仰をはいかてかそむ

きたてまつるへきはやく御力となり奉て彼国

の者ともを打したかへてまいらせよと申給ければ此童

いかにも宣旨をはそむきたてまつるへからすと申て

即竜宮城^{リウキョウジヤウ}に行て件のよしを申て珠を借えて

翌日^{ヨリジツ}早旦^{タカヘリ}に還て皇后の御前に持参つかまつる

其時御感なのめならず

図四

皇后しはらく対馬国に立よらせ給ふ彼所に白き

方なる石あり大菩薩を懷妊し奉給ひしに此石に御腹を

ひやして若胎内の太子日本の主^{アルジ}と成へくは今一月

生へからすとこしらへ給ふ御記文には此石我体と思

へしと^云御腹中にまします皇子に仰られたるは

吾異国を打したかへんかために是までわたれり我帰朝

の後生給へとて御裳^モのすそに石を裏^{ツミ}て御腰にはさみ

給て有しは此石の事也此故に御誕生なかりき皇后

忽に男の姿に成給て百済国へわたり給けり御方

船四十八艘乗船の軍兵一千三百七十五人也異国の

兵船十萬八千艘彼国々王大臣等嘲哂していわく

日本は劣^{イナシ}き国なりけり何ぞ女人を大將軍とするや

即彼国の軍兵とも雲霞のことく責^{セメ}来て皇后

の御方を打とり奉らんとす其時早珠を海中に

入給しかは大海たちまちにひあかりて陸地となる

その時彼国の物ともことく悦^{ユイ}ひて皇后宮を打

奉んとて塩干^{シラヒ}につゐておきの方へ追^{オイ}かゝりし時

早珠を取あけて満珠を下給しかは波蓬萊^{ホフライ}の

ことく立来て大海如元みちしかは異国の怨敵共皆

しほにたゞよひて一人ものこらす死^シ亡しぬ或縁起云

肥前国佐嘉郡に御座^{マシ}す河上の宮に彼二の珠は

納る長さ五寸計頭は二寸計也尾はほそき玉なり

仍皇后本意のことく異国の軍兵を打^{ホロボ}亡し給て

彼国をしたかへて仰^{ソコバク}られるは

我他国にして已に若干^{ソコバク}の人を殺害^{セツガイ}して殺生の名

をあけんことよしなしと思食^{ナゲキ}て御歎^{ナゲキ}ありしかは二の

竜王海中に出現して件死人を一人ものこさすくひ

うしなひぬ仍殺生をなけきおほしめしけるか故に

放生会を行給ひき然に今の放生会と申は

異国の死人の孝養^{コウヤウ}のためなり

図五

其時彼国の大王誓^{チカヒ}をたてゝ云われら日本国の

犬と成て彼国を守護せん全^{マツタククダイ}懈怠^{マツタククダイ}有へからず

若敵心あらは天道の責を蒙らむと云^{云々}爰^{爰ニ}

皇后石上に新羅国の大王は日本の犬也と書付

給ふ日本の軍兵帰て後国の恥^チなりとて石の

文をけつるにいよくあさやかなり薬を塗^{ヌリ}て焼^{ヤケ}

ともかなはずして今にありと云^{云々}

稽首八幡大菩薩 示現神通度衆生

断除十惡為十善 覆護衆生能与樂

其後皇后宮彼国を打したかへて筑紫国に

還^{カヘリツキ}着給て十日と申に鵜羽^{ウヅ}をもてうふ屋を造

給て槐^{エンジュノ}木に取付せ給て皇子をうみ奉給し間

其所をはうみの宮と名つたり今^辛の宇佐

の宮是也王子御誕生の時^{卯寅}は十二月十四日

剋也其故をもて卯日をは大菩薩の御縁日と

申也十二月十四日御誕生会^ユと申御神事行

給ふ今に侍り産宮南をうくる也さて日本記云

皇后のつき給へる御銚をは新羅国の王の門に

立らるさても明年の春二月に皇后都へ

むかひ御座すかさかの王^兄もおしくまの王^弟也皇子の

都へむかひ給ふ事を聞てひそかにたはかりまつ

皇后此由をきこしめして武内^{タケナリ}の宿禰に王子

をいたかせ奉て南海より紀伊国のみなとへ

つかせ給ふ皇后の御船は難波をさして渡り給ふ

其後武内宿禰彼王^{タケ}達をうつと云^々其後約

束のことく竜王の聳となし奉て備後国に

て若宮をうみ給ふ今の仁徳天皇是也

それより以来竜王の御孫たるにより蛇の尾

有けり其尾をかくさむかためになをしと申

物出来れり又皇后の異国を責給ひし時

御裳は今の宇佐の弥勒寺におさまれり

色も文もなをあさやか也

図六

其後皇后件の所より一里を去て御身煩^{ツツライ}

御心地例^{レイ}ならす思食てあなわひしと仰られたる

故に彼所をわひしとなつたりしかとも今

世にはたひしと申付たり其より一里をさりて

此日は何時になるそと空へあをかせ給たりし

所をは日まほりと名つれたり其後香椎^{カシイ}の

宮に付せ給てしはらく日数を経て王城へのほ

らせ給ひて御年三十一にて王位をつかさ取給ふ

日本記云仲哀天皇御宇九年の春二月天皇

崩御し給と云^{アル}或説云親り異国の矢に

あたりて崩御し給ふと云^{ヒソカ}儉^{ヒソカ}に天皇の骸^{ガイ}をは

武内宿禰海路より長門国豊浦宮へ送り

奉る未天皇葬^{ハツアリ}をし奉られす扶桑記云

神功皇后位に即せ給て其年御葬^{ハツアリ}をは河内

国長野山にうつす御年百歳にて崩御畢又

皇子七十御位治四十一年也都^{ミヤマス}大和高市郡

后八人男女御子九人今の八幡大菩薩は此御門の

御事也此御時百済国より色々の物の師博士^{ハツセ}なん

とをわたす又経^{キヤウデン}典吉馬等参りけり此御門は

仲哀天皇第四の御子応神天皇と申き其後

十善の位を振^{フリ}すて、道心堅固にして山林に

交^{マシハリ}給て定れる所なかりき雖然筑前国ますとみ

七郡か内に糟屋^{カス}の西郷^{サイガウ}と申所にて戒定^{カイテイ}恵^{ケイ}の箱

を埋^{ツミ}てしるしの松を立給へり彼しるしと申は

松の枝を打て逆^{サカシマ}に立給へるか故に彼所をは箱

崎のしるしの松と申也然に彼松権化のしはさ

なりしかは生付^{バイ}て逆なる松にて今の世までも

侍也其後応神天皇ほかなみの郡宮浦と申

所にわたらせ給て豊前国宇佐郡内本山と申

山の上御かきりをおろして其山のふもとにて此

分段の身をすてすして正覚を成し給ふ其所

を正覚寺と名付たり其時の御言云我をは

石体権現といはるへしと仰られて正覚成給て

後彼山の頂に三の石となり給へり其石の上より

金色の光都にさしたりしを仁徳天皇是をあやしみ

給て勅使を立られて尋させ給ふ程に彼山に尋行

て拝^{ツカミ}奉^{ツカミ}れは金の鷹にてあらはれ給ふ勅使其山の

ふもとにて宝殿を造てあかめ奉る其時より宇

佐八幡大菩薩とあらはれ給へり但八幡大菩薩

と名付奉事は彼戒定恵の箱を埋給ひし

るしの松のもとに空より八幡降^{フリ}たりき

赤^{アカ}幡^キ四白^{シロ}幡^キ四松のもとに社を造て赤幡宮

と云二所に其幡をあかめ奉る本地釈迦多宝

也然て八幡と頭^{アタレ}給ふことは此八幡のふりたりし

によりて大菩薩と現して百王守護の神と成給

はんと御託宣有て大菩薩の本地自在王菩薩

なりと曰^{イハレ}て金泥^{コンディ}の自在王経一卷石塔の中に納

め給へり又金泥の法花経一部彼戒定恵の

箱の底^{ソコ}に埋て其上に石塔をすへ給へり我朝

に仏法の渡り始事は此経一部一卷也 其後

天王寺被生地なりと被仰聖徳太子の三粒の

舍利彼赤幡宮の御宝前におさめ給へり箱

崎の松は東西をうくる

図七

正応二年

八月日